

「ちいさいおうち」

作・絵：バージニア・リー・バートン 訳：石井 桃子

大型本，40ページ，定価1,680円
(岩波書店，1965年12月)

「学術雑誌の推薦図書に絵本？」と思われる方も多いと思いますが，短くも強いメッセージを含んだ文章，そして写真では表現できない温かさをもった美しい挿絵は子供のみならず時に大人をも感動させてしまう，絵本はそういった不思議なチカラを持った媒体であると思います。

さて，今回紹介させていただく本書は一軒のちいさな家を主人公として，家の周りが時の流れと共に替わっていく様子が描かれているお話です。りんご並木のそばに建ち，近くには小川が流れ，ちいさな家はそこに住む人々とめぐる季節を楽しみながら幸せな時を過ごしていました。しかし，やがて家の周りにも都市化の波が押し寄せます。住む人はいなくなり，周りには高層ビルがそびえ，目の前を人の群れや自動車，そして電車が忙しく通り過ぎるようになります。夜空に星は見えず，季節の移り変わりさえわからなくなってしまいました。そんな喧騒の中にぽつんと建っていたちいさな家の前にある日，一人の少女が立ち止まりました。そして，その家は自分の先祖が代々住んでいた家であることを知ります。「自分の子孫たちがずっとずっとこの家で幸せに暮らせるように…」との思いでちいさいながらも立派な家を築いた先祖の想いを汲み取った少女とその家族は家を田舎に移すことを決意，ちいさな家は再び田舎で幸せな時を過ごすのでした。

都市化による弊害は環境汚染など私たちが携わっている環境科学の分野の問題にとどまらず，人間関係の希薄化，行き過ぎた物質文明の構築など多岐にわたります。しかし，これらの問題に対する知識があっても私たちは都市化によってもたらされる利益ばかりを追求してしまいがちです。一度，本書を手にとってみてください。ご家族のいらっしゃる会員の方々は是非ご家族で，そうでない方も「大人の絵本」として楽しんでいただくと同時に，本書から発せられる「現代社会への警鐘」に耳を傾けてみましょう。



(東海大学大学院 地球環境科学研究科 博士課程2年 村田真一郎)